バータ　さあ歩きましょう

佐々木たづ

朝日新聞社

佐々木　たづ

昭和7年東京都に生れる
〃 23年都立駒場高等学校入学
〃 25年眼疾のため両眼失明
〃 26年駒場高校退学
〃 33年第一童話集「白い帽子の丘」出版
〃 34年「白い帽子の丘」で第一回児童福祉文化賞受賞
〃 37年英国盲導犬協会に入り訓練をうけ盲導犬ロバータを得て帰国
現住所一東京都世田谷区成城町690-3

ロバータ　さあ歩きましょう
定　価　330円
発行日　昭和39年6月10日第1刷
著　者　佐々木たづ
発行者　浜名二正
印刷所　図書印刷
発行所　東京 北九州 大阪 名古屋　朝日新聞社
© 1964 Tazu Sasaki, Printed in Japan

佐々木たづ／ロバータ　さあ歩きましょう／目次

巻頭写真／八ページ

〈第一部〉ロバータ　話してきかせましょう

八月四日の悲しい出来事……一
耐えられぬ真白い太陽の光……二
視神経を圧迫する蓄膿の手術……二六
〝ゆがんだ世界〟が私をさいなむ……三〇
〝半年〟に空しい希望を託して……四一
お母さま、足が立たない！……四八
小康を得てラジオを楽しむ日々……五三
初めて味わうさびしいお正月……五七
やむなく高校を三年で中退……六二
西洋医学から漢方治療へ……六九
私は完全に両眼を失明した！……七四
英語、点字、そしてタイプを習う……七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈第二部〉ロバータ　あなたの力を貸して下さい

安住の世界を童話創作に求めて……八九
母の助けをかりて童話を書く……九九
初めての童話集を出版……一〇五
児童福祉文化賞を受賞……一一三
転機――盲導犬への心のいざない……一一八

〈第三部〉ロバータ　覚えているでしょう

英国盲導犬協会へ申請の手続き……一二九
申請は受理された！　英国へ旅立つ……一三三
ハックスレイ・ロード二十二番地……一三九
リーミングトン訓練所に入る……一四五
同僚五人と仲よく訓練開始……一五〇
待ちに待ったロバータとの対面……一五六
盲導犬に対する二つの鉄則……一六一

ロバータとの真剣な訓練……一六八
すぐれた指導で訓練に自信を持つ……一七七
訓練所の親切なスタッフたち……一八五
愉快な私の仲間の横顔……一九二
また会う日まで、さようなら……二〇二
帰国の機内で見せたロバータの能力……二〇七

〈第四部〉ロバータ　さあ歩いていきましょう

父母に示すロバータの愛情……二二五
四冊の雑誌で曲り方を研究……二二九
日本の道路に馴れたロバータ……二三三
「ねえ、ここ、角よ」……二三八
ロバータと過ごす富士山麓の夏……二三二
あとがき

Dear Readers:

It was the great turning point of my life when my application to the Guide Dogs for the Blind Association in England was accepted, and I was trained with the guide dog Roberta in the training centre at the Royal Leamington Spa. That was in the summer of 1962. My family and friends who had helped me all through the years since I lost my sight didn't imagine that I would have such a lovely and faithful companion to share my joy and to walk together with me on the way of my life. I would like to show my heartfelt thanks to all the people in England who helped me very much and gave me many happy experiences.

There is no need to tell you what a wonderful animal the guide dog is, but as a guide dog owner, I would like to say that in the future, even if medical science progresses tremendously and even if the time comes when special glasses can be supplied by ordinary occulists anywhere to people who lost their sight, I believe there will be still many people who would wish to have a guide dog, charmed by the loyal companionship between the man and his dog, that more than offsets his loss in many ways. I would, I am sure, be one of them if I were then under the same circumstances.

Tazu Sasaki

January, 1964.

第一部

失明から童話創作をはじめるまで

〈第一部に寄せて〉

ロバータ　話して聞かせましょう
あなたと会うまでのことを
ロバータも大好きな
わたしの　お母さん
お父さん
そして　お姉さんが
どんなに心をくだき
知恵をしぼって
わたしの幸福への道を　さがしてくれたか
やがて　その道の　行くさきで
ロバータ
わたしが　あなたに会えるとは
だれも　知らなかったけれど

ロバータ　話して聞かせましょう
どんなに　たくさんの人びとが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おしみなく　力をかして下さったかを
だれも
「代りに　やってあげましょう」
と　いわないで
みんな
「一人でする方法を　教えましょう」
と　いいました

ロバータ　話して聞かせましょう
わたしが　海を渡って
(盲導犬) 訓練を受けにいくことを思いついたとき
どんなに　みんなが　おどろいたか
それから心配し　期待し　それでも　やっぱり心配したかを
でも　ロバータ
私が　あなたのような　よい子をいただけると
もし　このとき
みんなが知っていたら
だれが　心配なんかしたでしょう

ロバータ　話してきかせましょう

八月四日の悲しい出来事

暑い日であった。私は買ったばかりの大学ノートの包みをかかえて、都立大学駅に向って歩いていた。とまっている一台の自動車のわきを、ちょっとよけて通り過ぎようとしたとき、そのかげから、はでな緑色の洋服をきた女の人が、こちらに歩いて来るのが見えた。すぐその後から、ほとんど同じ服装の人が歩いて来る、と思ったとたん、それは一つに重なった。ひとりの人だった。

電車に乗り、窓ぎわに立って風を受けながら、「一冊は世界史、一冊は解析(一)、それから幾何と生物と……」と、私はこの新しいノートの使いみちを頭のなかで割振った。包みの充実したおもみが腕に快かった。

うちへ帰り包みを机の上において、私はまず予定表を見た。八月四日。幾何と生物をする日だ。前から頼んでおいた幾何の参考書が、きのう届いたし、とてもいい都合だと私は思った。本立から

それを取上げて開いて見た。図解は鮮明だし、説明文も、いやにこみ合ってなくて何となく感じのいい本だった。買う前に、どんな参考書をえらんだらいいかと相談した知人が、この本を教えてから、「あまり数学の得意でない人にいい本ですよ」と、つけ加えたことを思い出して、おかしくなった。夏休みのはじめから作ってやってきたスケジュールも、もう身についたし、必要なものは全部整った。前の日、母がデパートで注文してくれた机と回転椅子は、二三日中に配達の予定だった。きょうから一だんと馬力がかけられそうだと思った。

まず洗濯してこよう。これは私の趣味の一つだった。根をつめたり、馬力をかけなければならないときは、ことさらこういうことをしないと、後の調子がよく出ない。ブラウスを二三枚、ソックスとそれに何枚かのハンケチを風呂場で洗い、井戸ばたへ出て、ポンプをたくさんくんだ。井戸のつめたい水でそれをゆすぎ、干しにかかった。

ふと見ると、いま使ったタライの横に、洗いあげた赤地に縞のあるハンケチを落しているのに気がついて、とりに戻った。かがみ込んで拾い上げようとして、私は、なあんだと思った。それはハンケチではなくて、色刷りの広告の紙が半分、水に濡れて井戸ばたのコンクリートに張りついているのだった。私は手の甲で、きのうから左のまぶたにできているモノモライを、ちょっとこすると、そのままとってかえして、また洗濯物を干しつづけた。干し終って裏口から家に上がりかけた私は、またタライのわきにハンケチが落ちていると思った。ときどきできるモノモライだが、ちょっとし

た場所の加減で、こんなに目の錯覚をおこさせるとは、いたずらなものだと思った。

今朝、髪をといたときには、モノモライは、そんなにふくらんでいなかったが、どんなぐあいになっているんだろうと、私は母の鏡の前にすわった。鏡がいやに汚れていた。引出しから布を出してふいたが、あまりきれいにならない。まあかまわないと、私はずっと鏡に近寄ってのぞいた。あまりふくらんではいなかった。今朝とほとんど同じように思えた。

昼ごはんのとき私は、母と姉に、きょうから、いよいよ本式の試験勉強だといった。「今までは序の口だったから」と私はつけ加えた。

「そう、いいね。でも、あんまり無理をしないでやりなさいよ。からだが一番大切だから」

と母がいい、姉は、

「それで、もう受ける学校はきめた？」

と聞いた。私は

「いま作ってある予定表通り勉強して、夏休みの終るときにきめるの。自分の実力をみて自分できめるのが一番いいでしょ」

と見得を切った。姉も母も笑っていた。私は思いついてノートの包みを取ってきて二人に見せた。

「わあ、書きよさそうなノートね。あたしもほしいわ」と姉がいうので、「こんど買ってきて上げるわね」と私は約束した。

私は机の前にすわって、さっきの幾何の参考書をひろげた。まず、椅子を深く引寄せて姿勢を正した。あまり得意でない科目をするときは、こうしないと長つづきがしない。読みはじめて私は、ちょっと窓の外に目をやった。雨でも降ってくるのではないかと思った。相変らずむし暑かったが、空は相当明るく、今すぐ降ってくる様子もなかった。本のはじめのところは幾何の概論のようなものだから、内容は別にこみ入ってはいなかった。それにしても、あまり印刷が良くない。ところどころスレたような個所がある。さっき見たところは、とてもいいと思ったけれど。私はなおも読み進んだ。

円と直線の図があった。それがまるで水に浮いているようにゆらゆらして見える。私は片手でモノモライのできている左の目をおおって見た。図はぴったりと平面に落着いた。でもページの上が何となく暗い。私は思いついて窓ぎわのレースのカーテンを全部しぼってみた。あまり変りはなかった。それで、こんどは窓の敷居に腰をかけて読みはじめた。そのとき玄関のベルが三つ鳴って、父が帰ってきた。私たち三人はほとんど同時に玄関に迎えに出た。

私たちはいつもよりすこし早く、夕食の膳をかこんだ。

「お父さま、きょうはいかがでした？　何か面白いお話あります？」と母が聞いた。

「そうだな、うーん」と父は会社の話、工事の話、近くまた出張しなければならないことなど話した。父は土木技師で、大成建設株式会社に永く勤めていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com